

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
101	政治学演習 I (浅野豊美)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	浅野 豊美
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

国民概念の探究－世界の紛争原因としてのナショナリズム理解と和解に向けて

授業概要 Course Outline

外交的妥協は、利益やパワーを計算し国益を折半して行われ、主体としての国民そのものは変化がない。他方で、「国民的和解」は国民という巨大な集団を作っている共有された記憶の変容を伴い、無意識のうちに相互の記憶が気づいたら変容しているような状態と定義される。それはいまだ現実には存在しない。しかし、東アジアでは「国民」形成が100-160年の間に急速に、国家主導で行われ、その国家が帝国として植民地支配も戦争も行い、また、冷戦下では開発独裁の主体ともなったために、上からの開発・豊かさか、下からの人間の尊厳と自由かが、国民的記憶のあり方をめぐって、国境を超えて、また、国内においても、いまだに摩擦・対立を続けている状態と定義できるであろう。授業では、国民、という存在を成立せしめている集合的記憶に焦点を当て、それを冷静に対象として認識し、各自の研究テーマ（安全保障・経済・文化に関わるもので各自が選択）に活かせるようにしてほしい。

授業の到達目標 Objectives

- ・右や左の政治的に極端な議論に面してもたじろがずに、冷静に対応できる軸を各自が持つこと。
- ・政治学と国際関係学の理論と、グローバルヒストリーとしての東アジアと日本の歴史学とを、対話させながら、長期的な時間軸をもって、現在の現象を認識し、独自に考える力を養う。そのため、テキストブックのどれか一冊を取り上げて、著者に問いかけ、社会に十分通用するような説得力のある卒業論文を仕上げることを目標となります。2年間は、その目標に向けて、関連する本と付き合わせて、皆で一緒に深く読みます。
- ・一回しか起きない現象としての現在の世界情勢は、過去のなんらかの側面を反復しつつ、全く新しい変化を伴ってスパイラル的に生じる。そのようなイメージで、現実を自分なりに認識・判断する力を養う。つまり、各自が関心を持つ分野とそれぞれの価値（安全－平和・経済－豊かさ・文化－生きがい）が、国民という巨大な集団を単位としつつ、それを超える地域や、その内部のより小さな団体をも視野に入れて、どのように世界を構成しているのかをイメージできるような知的体力と現実への構想力を養うことに、論文執筆はつながっていくでしょう。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

- ・テキストブックに簡単に目を通す。特に、英語のテキスト（Moyn, Samuel. The Last Utopia: Human Rights in History, Harvard University Press, 2010: E-bookで読める）と、リンハントの日本語訳を重視する。あとは、自分の身の回りの経験を思い出しながら、人権とは何か、豊かさとは何かを、自分の言葉と体験に根ざして考えてきてください。なぜなら、集合的記憶を選択せしめるものが、個人と全体、それぞれに関わる価値だからです。社会全体に関わる価値と、社会を構成する個に関わる価値、その二つが集合的記憶を分裂させたり安定させたりすると考えています。最初の授業で、自分にとっての人権という価値、豊かさという価値について、質問をします。各自のコアな部分に触れる体験を思い出してください。ただし、言いたくない人は、言える範囲で構いません。
- >>英語のテキストのPrologueに目を通して、自己・もしくは家族・コミュニティの体験を思い出して反芻してきてください。
- ・プレゼミでは、まず、ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2007年）について、今まで日本語・英語で出た書評を読み、ナショナリズムを自分なりに考えるミニレポートの執筆を目標とします。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション（ゼミの目的と概要）／本ゼミの目的と概要について説明します。Moyn, Samuel. *The Last Utopia*（E-bookで本学で読める）のプロログには以下のようにあります。人権という価値、集合的記憶についてが中心となります。

「1940年代以前には英語ではほとんど使われることがなく、わずかな増加しかなかった「人権」という言葉が、1977年にはニューヨーク・タイムズ紙で、同紙の歴史上のどの年よりも5倍近い頻度で掲載された・・・人権が緩慢で断片的な改革であるように見えても、その魅力の根底にあるのは、尊厳と尊敬に満ちた、もうひとつの、より良い世界のイメージなのだ。しかし、人権は、人類の出来事の中で信仰と活動主義を鼓舞してきた唯一の理想主義であるどころか、歴史的に最後のユートピアとして登場したのである。」

第2回：オリエンテーション続き：参考として浅野豊美『和解学叢書 第一巻 和解学の試み』2022および浅野豊美『帝国日本の植民地法制』（名古屋大学出版会、2008年）の序論と第5編・6篇。「人権や自由という普遍的価値も、豊かさや発展の希求という東アジアの共通の価値観も、それ自体としては、和解を導く原動力とはなりえていない。東アジアにおいて、国ごとに形成された記憶と価値のレジームは、国益やパワーをめぐる国民国家間の相互作用とからまりあいながら国の枠組みを超えた紛争を惹起し、それは「東アジアの記憶レジーム」とも言うべき堅固な構造を備えるにいたっている」

++順番を決める

第3回：購読：Moyn, Samuel. *The Last Utopia: Human Rights in History*, Harvard University Press, 2010の序論のみを各自が読んで、問題意識を交換する。

第4回：購読：Reus-Smit, Christian. *Individual Rights and the Making of the International System*, Cambridge University Press, 2013の購読を開始

第5回：購読：

第6回：購読：

第7回：購読：

第8回：購読：

第9回：購読：

第10回：購読：

第11回：購読：

第12回：購読：

第13回：購読：

第14回：購読：まとめ、各自の問題意識の整理

教科書 Textbooks

<以下の3冊を教科書として、この3冊を深く関連させて読むことがゼミの目標となります。E-bookあり、また、購入を勧めます>

- ・リン・ハント『人権を創造する』
- ・アライダ・アスマン『想起の文化—忘却から対話へ』岩波書店
- ・Moyn, Samuel. *The Last Utopia: Human Rights in History*, Harvard University Press, 2010
- ・Reus-Smit, Christian. *Individual Rights and the Making of the International System*, Cambridge University Press, 2013

<以上の3冊を読むための基礎文献として以下があります。さらに参考文献とあるのは3号館地下の学生読書室にあります>

ベネディクト・アンダーソン、白石隆・白石さや訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2007年）

ドブ・ローネン『自決とは何か』刀水書房

参考文献 Reference Books

宮城大蔵『「海洋国家」日本の戦後』ちくま新書、2008年。

三谷太一郎『近代日本の戦争と政治（岩波人文書セレクション）』（岩波書店、2010）

酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』（岩波書店、2007年）

浅野豊美『戦後日本の賠償問題と東アジア地域再編—請求権と歴史認識問題の起源』慈学社、2013年。

浅野豊美『帝国日本の植民地法制』名古屋大学出版会、2008年。

藤田 覚『天皇の歴史6 江戸時代の天皇』講談社学術文庫

黒川祐次『ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国』中公新書。

ゲルナー、加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年

浅野豊美『和解学叢書 第一巻 和解学の試み』

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	40%	最終レポート執筆以前に、予備的なレポートを少なくとも一回課す。
平常点評価 Class Participation	30%	演習への出席、授業参加意欲を総合的に評価する。 三回以上無断欠席したものは単位を取れない。
そ の 他 Others	30%	レジュメ（報告の際に準備してくるプリント）

備考・関連URL Note・URL

講義に全く出たことがないヒトは以下の模擬講義が参考となる。
<http://www.waseda.jp/taiken-waseda/academics/school/pse/>

以下が、自己紹介のHP。 将来は、ゼミのためのHPを作成する予定。
<http://www.f.waseda.jp/toasano/index.html>

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。
履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。
The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.
Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.
<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
102	政治学演習 I (稲継裕昭)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	稲継 裕昭
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

行政の諸活動を分析する

授業概要 Course Outline

行政の諸活動は私たちの生活に知らず知らずのうちに大きな影響を与えている。

ある行政活動は、どのような構造のもとに、どのようなアクターが、どのように行動することによって行われているのか。

基礎的なことを学ぶとともに、いくつかの行政課題およびその解決策を特定し、なぜそのような行動がとられたのかその原因を考える。

ゼミのキーワードは、「書を持って街へ出よう」です。理論と実践の統合を目指します。教室による輪読などの座学と、フィールドワークとを組み合わせているのが、当ゼミの特徴です。輪読などによる基礎知識の習得と、現場に出たり（現場の方を迎えたり）して、実践的な動きを把握することとを組み合わせる学びます。プレゼミでは基本書を読み、3年生からは実践を経験しつつそれを理論的に分析することを目指します。3年次にグループ研究を進めて、調査方法や分析方法について学び、4年次には個々人の卒論を仕上げます。

中央省庁や地方自治体の幹部や若手職員をゲストスピーカーとして招く場合があります。

2022年以降の実績・・総務大臣政務官（衆議院議員、元自治官僚）、総務省公務員課長、総務省若手官僚、財務省主計局若手官僚、福井県越前市長・元福井県副知事、国会議員（元防衛大臣）、CodeForJapanスタッフ/滋賀県日野町参与、デベロッパー若手

#中央省庁や地方自治体を訪れてヒアリングなどを行う場合があります。

2022年以降の実績

福井県越前市役所（市長面会）、豊島区役所、富山県庁（知事面会）、金沢市役所、高山市役所、三重県伊勢市役所、多紀町役場、高知県日高村、梶原町、高知県庁、山口県山口市、岩国市、北海道上士幌町、長崎県長崎市、大村市、

1年間を通して特定の自治体にフィールドワークに入り、政策提言を行っています。

2018年茅ヶ崎市、岡山県真庭市、2019年岡山県美咲町、2020年岡山県美咲町、茅ヶ崎市、2021年茅ヶ崎市、2022年茅ヶ崎市、2023年茅ヶ崎市、荒川区日暮里繊維街（地域活性化のご提案）、

2024年の場合、3年生＝茅ヶ崎市、日暮里繊維街（こちらはプレゼミ生に引継ぎ）、4年生＝福井県（ウェルビーイングに関する提言。小浜市・越前市・県。福井県庁と早稲田大学とで契約をしています）

#合宿は、3年の夏、3年の冬、4年の夏の3回、2泊3日で行います。合宿への参加は単位取得のために必須です。

コロナ禍期間中は殆どできませんでしたが、現在は完全に元に戻っています。過去3年間、合宿は次の場所で行いました。

2022年夏は4年生が富山県庁、金沢市役所、3年生が越前市役所、2023年春は3年生が高山市役所。

2023年夏は4年生が三重県（伊勢市、多気町）、3年生が高知県（日高村、梶原町）、2023年冬は3年生が山口市役所、岩国市役所

2024年夏は4年生が北海道（上士幌町中心に3泊4日）、3年生が長崎県（長崎市、大村市）

授業の到達目標 Objectives

行政に関する諸課題について政治学的に考察する力、文章で表現する力を培う。
論理的に考え書き発表する能力を養うこと。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

プレゼミで、『行政学』（曾我謙吾）、『立法学』（中島誠）を読んでもらいます。
その報告の過程で、パワーポイントの作成の仕方、効果的なプレゼンの方法、論理的思考を身に付ける種々の取り組みを行います。
報告に際してはそれぞれ4年生のメンターがつきます。
プレゼミは例年、毎週火曜日の5時限に教室に来ていただいて、上級生に交じって受けてもらっていました。

フィールドワークで出かける時（プレゼミ期間中に、1回か2回）は、3時限終了後すぐに大学を出発します。（遠方へ行く場合は、2時限終了後に大学を出発することもあります）。
例年、プレゼミ期間中にフィールドワークに出かけます。

授業計画 Course Schedule

第1回－第5回：演習イントロ。R入門講座、「行政学」の残りの輪読。

第8回－第14回：ゼミ生で決めてもらいます
1、2回のフィールドワークと、1、2回のゲスト講師。

合宿は参加必須ですが、行き先や時期はゼミ生で話し合って決めます。これまでは、3年夏、3年冬、4年夏の3回の合宿をしてきました。

2泊3日の日程は、おおむね1日目、2日目に自治体を訪問しヒアリングなど、3日目は適宜観光等を行っています。

その他ゼミ生主体で予定を決めていきます。

なお、合宿参加は必須で、合宿に不参加の場合は単位不可となります。

大勢で行動することが苦手であるなど合宿参加ができない人は最初から申し込まないでください。

教科書 Textbooks

曾我謙吾『行政学』有斐閣アルマ
中島誠『立法学（第3版）』法律文化社

すでにプレゼミで輪読を終えているテキスト（北山俊哉ほか著『初めて出会う政治学』、久米郁男『原因を推論する』、戸田山和久『新版 論文の教室』、北山俊哉・稲継裕昭編著『テキストブック地方自治』）も適宜参照することがあります。

参考文献 Reference Books

年報行政研究のバックナンバーも輪読します。
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jspa1962/-char/ja/>

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	60%	特別の事情がない限り欠席を認めていませんので、欠席の際には大きく減点。なお、5時限で終わらず6時限に延長することもあるので、サークルへ活動が火曜日にある人は継続が困難です。 課題のMoodleへの期限内提出。(期限に遅れると大きく減点) 報告内容、討議への参加度。レポート課題に対し剽窃が見つかった場合は厳しく対処します。
その他 Others	40%	行事(合宿、フィールドワーク、その他)への参加度も評価の対象となります。合宿への参加は必須。

備考・関連URL Note・URL

ゼミ生たちが自主的に作成・運営しているゼミのホームページ（作成に稲継は関与していません（PWも知らない）が、適切に作成してくれており、ゼミ活動やゼミの雰囲気を知る上で大変参考になると思います）
<http://inatsuguzemi.wix.com/wasedapse-undergrad>

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
103	政治学演習 I (稲村一隆)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	稲村 一隆
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

政治哲学・思想史

授業概要 Course Outline

政治哲学は社会規範について探究する学問です。国際援助と分配の正義、能力主義、正戦論、フェミニズムと結婚、人権と動物の権利、といったトピックについて、現代社会で生じている問題を知ると同時に、そうした問題の背後にある考え方を知ることが主眼です。そこで具体的な事例から出発しつつも、理論的にかつ歴史的に広い視野で考察することになります。

本演習では、まずインプットが重要なので、政治哲学の基本文献を通して上記のトピックを学んでいきます。基本文献として、西洋政治思想史の古典を講読したり、現代の理論的な著作を検討したりしています。どのテキストを扱うかは参加者の関心に応じて決めています。前者の例として、プラトン『国家』、アリストテレス『政治学』、ロック『統治二論』、カント『永遠平和のために』、ミル『自由論』、アーレント『人間の条件』、フーコー『性の歴史』など、後者の例として、アマルティア・セン『不平等の再検討』、アイリス・ヤング『正義と差異の政治』、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』など。最近では、歴史学や文化人類学の視点を通して政治哲学の課題に取り組むことを重視しています。論理的に分析するだけでおしまいとするのではなく、想像力を働かせて、他の文化や他の時代のことを理解しようとする姿勢を推奨しています。

一人で読んで理解するのは難しくても、みなで議論しながら考察すると、学部生の間に十分に理解を深めることができるようになります。

本演習の特色の一つとして、論文の執筆を重要視しています。教員の英国での経験を生かして、政治哲学・思想史分野での論文の書き方を学習します。

トピックの選定については参加者各自の自主性を尊重しつつ、任意のトピックについて十分に資料を収集してから、毎学期、レポートを書きます。

自分と異なる見解を持つ人も説得できるように、丁寧に議論を作る訓練をします。

授業の到達目標 Objectives

- 1) 当該分野の古典を読む訓練を積むこと。
- 2) 当該分野の英語論文を読む習慣を身につけること。
- 3) 当該分野で論文を書く技法を身につけること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

あらかじめ指定された文献を読んで議論したい点を考えてくること。毎回、予習が必要になります。

また期末レポートに向けて、自分でトピックを選び、それに必要なことを自分で調査することが求められます。

何をトピックにするかは参加者の自主性を尊重しています。

授業計画
Course Schedule

具体的な計画は学期のはじめに参加者と相談の上、決定します。

3年次は文献の講読を中心に行います。テキストを読む訓練を積みみます。

4年次は文献の講読だけでなく、卒業論文の作成にも取り組みます。先行研究を踏まえた上で、新しい議論を提示することが求められます。
期末レポートをもとに授業内での討論を通して、徐々に完成できるようになります。

教科書
Textbooks

初回の授業で指定します。

参考文献
Reference Books

政治哲学の入門書として以下を参照：

マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう』早川書房、2011年。

ジョナサン・ウルフ『「正しい政策」がないならどうすべきか』勁草書房、2016年。

アマルティア・セン『人間の安全保障』集英社新書、2006年。

論文の書き方や、政治哲学・思想史の方法論の著作として以下を参照：

野矢茂樹『新版 論理トレーニング』産業図書、2006年。

井上彰、田村哲樹（編）『政治理論とは何か』風行社、2014年。

デイヴィッド・レオポルドほか（編）『政治理論入門』慶應義塾大学出版会、2011年。

犬塚元ほか「政治思想史の新しい手法特集号」『思想』no. 1143、2019年7月。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	十分な調査を行なっているかどうか、議論を丁寧に組み立てているかどうか
平常点評価 Class Participation	50%	授業中の議論に積極的に参加しているかどうか
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
104	政治学演習 I (梅森直之)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	梅森 直之
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

「和解学」の展開：東アジア歴史認識問題の脱構築にむけて

The Development of "Reconciliation Studies": Toward the Deconstruction of East Asian Historical Perceptions

授業概要 Course Outline

「紛争」が、社会生活をおくる人間の宿命であるかぎり、「和解」もまた人間の普遍的な営みの一部である。しかし和解はつねに、一定の歴史的・文化的刻印を帯びてあらわれる。紛争を生み出す社会の編制は多様であり、また歴史的に変化するものであるからである。和解学とは、和解をめぐる積み重ねられてきた人類の思索と実践を総合的にとらえ直し、未来に向けた社会構築のヴィジョンを構想する新しい学知である。「和解学」とは、単に既存の紛争を解決するための技術論を意味しない。むしろそれは、「和解」という現象そのものの構造を、それに対する原理的な反対を含め、根源的に考察するアプローチである。本ゼミでは、東アジアが現在直面しているさまざまな「紛争」を取り上げ、その解決を、思想史的方法に依拠しつつ検討していく。具体的には、東アジアの歴史を、「ナショナリズム」、「ジェンダー」、「資本主義」という三つの視座から解きほぐすことを試みる。東アジアの歴史を、和解学の基礎理論と重ね合わせながら議論することを通じて、歴史問題をめぐる解決の糸口を構想する。

As long as "conflict" is the fate of human beings in social life, "reconciliation" is also a part of universal human activity. Reconciliation, however, always appears with a certain historical and cultural imprint. The social arrangements that give rise to the conflict are diverse and historically variable. Reconciliation studies is a new academic knowledge that comprehensively reassesses humankind's accumulated thought and practices regarding reconciliation and envisions a vision of social construction for the future. Reconciliation Studies" does not simply mean a technical theory for resolving existing conflicts. Rather, it is an approach that fundamentally examines the very structure of the phenomenon of "reconciliation," including the principled opposition to it. In this seminar, we will take up various "conflicts" that East Asia is currently facing and examine their resolution, relying on the method of the history of ideas. Specifically, we will attempt to unravel the history of East Asia from the three perspectives of "nationalism," "gender," and "capitalism. Through discussion of East Asian history, superimposed on the basic theories of reconciliation studies, we will envision clues to resolving historical issues.

授業の到達目標 Objectives

テキストの「読み方」の習得
自分の考えを効果的に伝える「書き方」の練習
生産的に「議論する」訓練
思想史的方法、ならびに社会理論についての基本概念の習得
日本の歴史についての基本的知識の習得
「和解学」の基礎としてのナショナリズム論、ジェンダースタディーズ、資本主義論への理解

Learning how to "read" texts
Practice "how to write" to effectively communicate your thoughts
Practice "discussing" productively
Acquisition of basic concepts of the historical method of thought and social theory
Basic knowledge of Japanese history
Understanding of nationalism, gender studies, and capitalism as the basis of "reconciliation studies"

事前・事後学習の内容
Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示する

The instructor will give instructions in class as appropriate.

授業計画
Course Schedule

本ゼミでは、以下の四つの次元において、東アジアの歴史問題の構造を明確化することをめざす。ゼミの進め方としては、関連テキストの輪読と学生の報告に基づく議論が中心となる。

問題に接近する第一の次元は、「歴史とは何か」を根源的に問い直すことである。歴史は、客観的な事実であると同時に、一定の意味を発生させる物語でもある。「歴史」そのものの重層的な構造を解明することを通じて、東アジアの各国の歴史認識が対立する理由とその和解に向けた可能性について議論する。

第二の次元は、「ナショナリズム」である。東アジアの近代を、戦争と帝国主義と植民地主義により織りなされたひとつの歴史空間として把握することを通じて、各国のナショナリズムの特質を構造的に把握することをめざす。

第三の次元は、「ジェンダー」である。「従軍慰安婦」問題は、日韓の国民的対立であると同時に、東アジアにおける女性の社会的位置づけの反映でもある。東アジアにおける女性の歴史を、こんにちのジェンダーギャップ問題と重ね合わせながら振り返っていく。

第四の次元は、「資本主義」である。東アジアに共通する根強い発展志向が、どのように「紛争」を惹起し、またそれを隠蔽してきたかを確認する。

本ゼミでは、具体的なテーマに則したディスカッションに加え、学術論文の書き方、プレゼンテーション・スキルアップの方法等についてのワークショップを、必要に応じて適宜行う。

This seminar aims to clarify the structure of East Asian historical issues in the following four dimensions. The seminar will be conducted mainly through discussions based on the reading of related texts and student reports.

The first dimension of approaching the problem is to question "what is history fundamentally? History is both an objective fact and a narrative that generates certain meanings. Through the clarification of the multilayered structure of "history" itself, we will discuss the reasons for the conflicting historical perceptions of East Asian countries and the possibilities for reconciliation.

The second dimension is "nationalism. By understanding modernity in East Asia as a historical space woven by war, imperialism, and colonialism, we aim to grasp the structural characteristics of nationalism in each country.

The third dimension is "gender. The "comfort women" issue is not only a national conflict between Japan and South Korea but also a reflection of the social position of women in East Asia. The history of women in East Asia will be reviewed in light of the current gender gap issue.

The fourth dimension is "capitalism. We will identify how the deep-rooted development orientation common to East Asia has both attracted and obscured "conflicts.

In this seminar, in addition to discussions on specific themes, workshops on how to write academic papers, how to improve presentation skills, etc. will be held as needed.

教科書
Textbooks

授業期間中に指示する。

Instructions will be given during the class period.

参考文献
Reference Books

梅森直之『初期社会主義の地形学』（有志舎、2016）

梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』（光文社、2007）

ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』（岩波書店、2007）

コンラート『グローバルヒストリー』（岩波書店、2021）

Benedict Anderson, *Imagined Community*

Harry Harootunian, *Overcome by Modernity*

Conrad, Sebastian, *What is Global History?*

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	授業参加ならびにレポートを総合的に評価する。 Class participation and reports will be evaluated comprehensively.

備考・関連URL Note・URL

これまでの基礎知識は問いませんが、これからの学習に対する強い意欲と好奇心ならびに知的柔軟性と持久力が必要です。無断欠席3回以上で、評価の対象から外します。

自国の事例を、他国に向けて発信したり、自国以外の国の人々と積極的に議論する意欲と能力を持つ学生を歓迎します。

No previous basic knowledge is required, but a strong desire and curiosity for future learning and intellectual flexibility and endurance are necessary.

More than three unexcused absences will be disqualified from the evaluation.

We welcome students willing and able to communicate their own country's case studies to other countries and actively discuss them with people from other countries.

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
105	政治学演習 I (尾野嘉邦)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	尾野 嘉邦
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

選挙と投票行動

授業概要 Course Outline

投票行動に焦点を当てた政治行動論の演習です。人間はいろいろな場面で選択を迫られますが、選挙における投票という行為も選択の一つです。選択を迫られたとき、人はどのように決めるのだろうか、選択を左右するものは何だろうか、より良い選択をするにはどうしたらよいだろうか。フェイクニュースやデジタルテクノロジーなどによって、人々の自発的選択が無意識のうちに誘導されてしまうことはないのだろうか。選挙で当選を目指す候補者ならば、どう行動したらよいのだろうか。選挙という場面に焦点を当て、選挙における人々の選択(投票行動)と民主主義の行方について、心理学や行動経済学なども参考にしながら考え、学術研究として新しい知見のアウトプットを目指す演習です。その過程で、データの実証分析やサーベイ実験を始め、研究成果のプレゼンテーション、論文執筆などにもチャレンジしてもらいます。

授業の到達目標 Objectives

学際融合型の社会科学研究の最前線に触れつつ、社会科学の考え方を学ぶとともに、物事を多様な面から客観的かつ批判的に考えることができる思考力を養う。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

演習時間外に実験課題などに取り組むことが求められる。

授業計画 Course Schedule

政治学の分野では、学部生の卒業論文や研究が学術雑誌に掲載されるケースが増えてきました。また、最近では米国中西部政治学会といった海外の学会などで、学部生が研究発表を行う機会も設けられています。2年間の演習を通じて、一緒に出版可能な学術研究に取り組んでいきましょう。

前期は、社会科学の基礎的な考え方や研究方法を学びつつ、政治学や心理学、経済学、脳科学を中心として、投票行動・政治行動に関する社会科学の最先端の研究内容や、国際学術誌への投稿プロセスなどについて紹介します(学術論文の査読にも挑戦してもらいます)。ニューロサイエンスや生命科学、AIを活用したテキスト分析・顔形態分析など、工学や自然科学の知見が社会科学にどのように活用されるのか、そしてどのような貢献が可能なのかについても検討していきます。その過程で、先行研究を読んでレビューするとともに、さらに研究してみたいリサーチクエストンについて考えてもらいます。

後期は、各自のリサーチクエストンをもとに、実際の研究に取り組みます。データをどのように集め、分析をしたらよいのか、リサーチデザインを練り、サーベイ実験などを通じて、仮説を検証する作業を行ってもらいます。

1. イントロダクション
- 2-6 政治学における投票行動関連研究
- 7 研究アイデア発表
- 8-10 心理学における投票行動関連研究
- 11-13 経済学・脳科学における投票行動関連研究
- 14 まとめ

教科書
Textbooks

参考文献
Reference Books

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	20%	プレゼンテーションに基づき評価する。
平常点評価 Class Participation	80%	議論への参加・貢献度合いに基づき評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

この演習では基本的に英語で書かれた文献を扱うとともに、英語でのアウトプットを目指します。参加者には英語読解能力が求められますが、英文を読んだり、書いたり、話したりすることに慣れていない人も、演習での訓練を通じて、そのスキルを磨いていきましょう。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
106	政治学演習 I (国吉知樹)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	国吉 知樹
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

現代日本外交の分析

授業概要 Course Outline

本演習では現代日本の国際関係・外交について理論および歴史の両面から考察する。

演習では、最初に基礎的なテキストの輪読と議論を通じて国際政治学の基礎概念について理解を深める。つづいて戦後日本外交史の論争点について日米関係および日本と近隣アジア諸国の関係に焦点を当てて分析を行う。さらに現代日本外交に関わる分析概念や論争的なイシューについて代表的な文献をたたき台にして議論をする。ここでは日本の安全保障問題、歴史認識問題とアジア外交、日中間の経済相互依存の意義、日韓文化交流の意義、日ロ間領土問題、日本の地域主義外交、沖縄の基地問題、気候変動問題への取り組み、および「人間の安全保障」分野、とりわけ日本の難民政策などを取り上げる予定である。

また、春学期の中盤から秋学期にかけて、ゼミ内で3～4人からなる複数のグループを組み、それぞれのグループが戦後日本外交に関わる論争的なイシューについてテーマを決め、外交文書の調査・分析を行い、共同論文の作成に取り組む。

演習 I では以上のようなプロセスを通じて外交を分析するための手法・視点を磨き、卒業論文執筆のための準備を進めていく予定である。日本が現在直面する外交上の諸問題を理解するために、国際関係の理論と歴史の習得に熱意を持って取り組み、積極的に議論に参加する意欲を持った学生を歓迎する。

授業の到達目標 Objectives

1. 国際関係論の基礎概念を理解する。
2. 現代日本外交の形成と意義を理解するために必要な理論的・歴史的分析手法を習得する。
3. グループ論文への取り組みを通じて、学術論文を執筆するために必要な研究の手順、調査の方法を学び、執筆の心構えを身に付ける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

- ・受講生はゼミでの議論に積極的に参加するために、事前に必ず課題文献を読んで演習に臨むことが求められる。
- ・グループ論文の作成にあたっては、グループ間で事前に文献や資料を検討し、共同で発表準備を行う。
- ・グループ論文の作成にあたって、授業でのフィードバックを基にして、新たな調査を行い、論文の執筆と修正を行う。

授業計画 Course Schedule

- 第1回：ガイダンス
 第2回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（1）
 第3回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（2）
 第4回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（3）
 第5回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（4）
 第6回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（5）
 第7回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（6）
 第8回：文献講読とディスカッション：国際政治学の基礎概念（7）
 第9回：日本外交 グループ論文の作成：テーマ設定について
 第10回：日本外交 グループ論文の作成：リサーチデザインの検討と資料調査について
 第11回：日本外交 グループ論文の作成：先行研究の検討（1）
 第12回：日本外交 グループ論文の作成：先行研究の検討（2）
 第13回：日本外交 グループ論文の作成：先行研究の検討（3）
 第14回：日本外交 グループ論文の作成：調査の中間報告とディスカッション

教科書 Textbooks

大矢根聡編『戦後日本外交から見る国際関係：歴史と理論をつなぐ視座』（ミネルヴァ書房、2021年）。
 ピーター・カッツェンスタイン『文化と国防：戦後日本の警察と軍隊』（日本経済評論社、2007年）。
 国分良成・添谷芳秀・高原明生・川島真『日中関係史』（有斐閣、2013年）。
 マイケル・シャラー『「日米関係」とは何だったのか：占領期から冷戦終結後まで』（草思社、2004年）。
 ジョン・ダワー『敗戦を抱きしめて』（増補版 上・下）（岩波書店、2004年）。
 高橋哲哉・山影進編『人間の安全保障』（東京大学出版会、2008年）。
 ヴィクター・D. チャ（倉田秀也訳）『米日韓 反目を超えた提携』（有斐閣、2003年）。
 波多野澄雄・佐藤晋『現代日本の東南アジア政策』（早稲田大学出版部、2007年）。
 波多野澄雄編『日本の外交 第2巻：外交史 戦後編』（岩波書店、2013年）。
 中島信吾『戦後日本の防衛政策—「吉田路線」をめぐる政治・外交・軍事』（慶應義塾大学出版会、2006年）。
 宮城大蔵編『戦後日本のアジア外交』（ミネルヴァ書房、2015年）。
 吉田真吾『日米同盟の制度化：発展と深化の歴史過程』（名古屋大学出版社、2012年）。
 若宮啓文『戦後70年 保守のアジア観』（朝日新聞出版、2014年）。
 李鍾元・木宮正史・磯崎典世・浅羽祐樹『戦後日韓関係史』（有斐閣、2017年）。
 Joseph S. Nye and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History, 9th edition, Pearson Education, 2012.

参考文献 Reference Books

ゼミにおいて適宜紹介する。

グループ・ワークの際には、外務省が編纂・刊行した戦後期の『日本外交文書』を適宜参照する。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	グループ論文作成への取り組み
平常点評価 Class Participation	70%	プレゼンテーション (30%); 出席および議論への参加、ゼミ運営への貢献 etc. (40%)
その他 Others	%	

- ・グループ論文の作成にあたっては、外務省外交史料館で調査を行う。
- ・春（３月）および夏（８月末あるいは９月初め）に２学年合同で合宿を行う予定です。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。
履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.
Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
107	政治学演習 I (栗崎周平)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	栗崎 周平
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

国際政治の理論研究・実証研究
Scientific Study of International Relations

授業概要 Course Outline

担当教員はゲームモデル分析とデータ科学を用いた研究で、安全保障政策では政府機関やシンクタンクといった政策コミュニティに対するコンサルティング、また経済安全保障関連では国内の政府機関および一般企業の経営企画部門やコンサルティング会社に対してコンサルティングを行なっていることから、ゼミでは進学せず就職する学生が多いことに鑑み、こうした経験が全面に出てくるような運営を心掛けます。また、一定のスキルを持つゼミ生にはリサーチアシスタントないしインターンとして、担当教員が学外で行う事業案件に参画する機会の提供を模索します。

こうしたことから、本ゼミでは、国際政治の時事問題を討議したり、既存の文献を読んで既存の知識を吸収することはせず、国際政治分析という土俵であるものの、独自の研究プロジェクトを企画・実行し、自ら新しい知見を創造するというプロジェクトマネジャーとしての工程を経験することも目的にします。

国際政治、主に安全保障に関わる論点（国際紛争、平和構築、内戦、国際組織、国家間競争など）について、その原因、メカニズム、解決策、さらには政策論的含意などを考察するために、理論研究ないし実証研究を行います。単なる時事問題の討議や既存研究の評論に留まらず、各々が持つ国際政治についての問題意識に基づいて独自の学術研究を二年間かけて行います。理論研究ではゲーム理論を用い、実証研究では計量分析を行います。ゲーム・モデルの分析から導出された仮説の検証という、理論と実証の組み合わせでも構いません。研究テーマは独自の研究を行うことを推奨しますが、学生間の共同研究を推奨します。また担当教員のプロジェクトに共同研究者として参画することも可能です。担当教員の現在の主な研究課題は、国際紛争における外交（非軍事的手段）が果たす役割についてのゲーム理論を使ったモデル分析、統計データを使った実証分析、危機外交の理論モデル分析、政治（民主）制度の情報効果の定量的な実証分析、日本の集团的自衛権問題を含む東アジア国際関係の理論分析と実証分析、さらにはテキストマイニングなどのビッグデータ分析を来年度から始動します。

「ゼミ制度」は日本の大学制度の優れている点で、とくに社会科学ではこのゼミ制度を有効利用することで、北米のトップスクールと互角にあるいはそれ以上の成果を出すことが可能です。本演習ではこの「ゼミ制度」の強みを最大限利用します。そのために、毎週の演習では自身の研究のみならず他の研究プロジェクトについても討議を全員で行うことによって研究上の問題を協同して解決するとともに研究のノウハウの共有を図ります。ゲーム分析におけるモデル化や均衡導出と解析、計量分析におけるデータ収集・統計モデル構築・プログラミングなどは、毎週、参加者同士で切磋琢磨する中で習得してもらいと同時にハンズオンの指導を行います。ゲームモデルの分析やデータ分析など必要なプログラムはGoogle Driveで全て共有して他のゼミ生も同時に分析をゼミの場で行うことで、他のゼミ生にとっては「練習問題」にもなります。

授業の到達目標 Objectives

- (1) 大学・政治学研究という枠の中ですが、国際舞台・研究競争に打って出る力を養う。
- (2) ゲーム理論による理論研究や統計分析による実証研究を通して、論理的に説得的に魅力的に議論を展開できるようになること。
- (3) そのための技術の習得 (Critical thinking, argumentation, 問題発見能力と問題解決能力、プロジェクト立案遂行能力、ロジック、データ分析、ライティング、プレゼンテーション能力)。
- (4) 文献の読み方3つのテクニック (本2時間読了、論文裏読み、短期間多読) を身に付ける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

実証分析に関しては、データを扱う事の楽しさを味わってもらために政治学教員が担当する「政治経済の計量分析」を薦めます。「計量政治学」はUCLA政治学部と同内容ですのでお勧めします。

解析的・分析的な政治の理論研究に関しては、モデル分析の面白さを味わってもらうために、例えば「比較経済制度分析」などがお勧めです。

授業計画 Course Schedule

演習 I & II :

第1回 : インTRODクシヨN

第2-15回 : Kydd教科書や研究論文 (APSRなど) の輪読と各自研究テーマについてのブレインストーミング

第16-20回 : 関心テーマについてLiterature Review報告

第21-25回 : 先行研究の再現・複製を通した研究プロジェクト企画立案

第26-30回 : 研究プロジェクト (パイロットスタディ) 発表

演習 III & IV :

第1-2回 : ISA学会プロポーザル (300 words) 批評会

第3-10回 : プロジェクト遂行とLabミーティング

第11-20回 : プロジェクト中間報告とLabミーティング

第21-30回 : 研究成果の論文執筆と発表への準備

教科書 Textbooks

David A. Lake and Robert Powell. 1999. Strategic Choice and International Relations. Princeton University Press.

Andrew Kydd. 2015. International Relations Theory: Game Theoretic Approach. Cambridge University Press.

国際政治研究の主要学術雑誌 : APSR, AJPS, IO, IS, JCR, ISQ, などが実質的な教科書となります。

参考文献 Reference Books

特になし。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	0%	N/A
レポート Papers	0%	N/A
平常点評価 Class Participation	100%	参加することに意義があります。各人のゼミとの付き合い方は様々であっても良いと考えています。上記の栗崎の提供する教育サービスをどのように利用するかは、各自が決定すべきことで、それに応じて成績は割り当てられると考えてください。したがって、オリジナルの研究をしないというスタイルの参加であれば、それ相応の成績を取得して頂く、というビジネスモデルです。
そ の 他 Others	0%	N/A

備考・関連URL Note・URL

ゼミには正式登録しない参加希望者は直接連絡を下さい。ゼミ未登録者による参加はこれまでも参加いただいております。学内他学部に留まらず学外からの参加者もいます。

本演習で作成されることが期待される学術論文やポスターは下記から参照できます：
https://drive.google.com/file/d/0B_-BxaJ90WcoS0hjWE9CcXZJZGs/view?usp=sharing
https://drive.google.com/file/d/0B_-BxaJ90WcoclhvZ0xyYklrZms/view?usp=sharing

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習Ⅰ

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
108	政治学演習Ⅰ（小林哲郎）	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	小林 哲郎
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目（政治/経済/国際政治経済）> 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

メディアと世論の関係について学ぶゼミ

授業概要 Course Outline

政治におけるメディアとコミュニケーションの関係について学び、実証的な仮説検証を行います。政治学だけでなく、社会心理学やジャーナリズム研究など幅広い関心を持つことが必須となります。前期は実証研究のための基礎的な訓練と文献レビューを通してリサーチクエストを深めると同時に、データ収集の準備を行います。後期はデータに基づいた仮説検証と、論文の執筆を行います。

調査や実験データの分析、メディアの内容分析を行いますので、基礎統計レベルの知識とRやStataなどを使った基本的な分析スキルを持っていることが望ましいです（ただし必須ではない）。また、英語論文も読みますから英語力は必須です。

授業の到達目標 Objectives

データに基づいて仮説検証を行う力を身につけること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

自発的に研究課題に関する文献を読み、考え、手を動かして分析する。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション

第2回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第3回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第4回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第5回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第6回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第7回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第8回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第9回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第10回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第11回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第12回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第13回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

第14回：学生が主体的に発表を行い、教員がフィードバックを行うスタイルで演習を行う。

教科書 Textbooks

追って指示する。

参考文献
Reference Books

追って指示する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	60%	研究発表のプレゼンテーションと論文で評価する。
平常点評価 Class Participation	40%	ゼミへの参加と積極的な発言によって評価する。正当な理由がある場合を除き、無断欠席が2回あった場合には評価は不可とする。
その他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
109	政治学演習 I (小原隆治)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	小原 隆治
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

自治・分権を考える

授業概要 Course Outline

自治・分権をめぐるさまざまな問題を多面的な角度から考察する。政治学演習I(春学期)は、参加者が複数のテキストを輪読形式で読み進める。今年度は、まず最初に担当教員が著した論文1本を取り上げて検討する。そのあと3人の著者の手になる教科書的なテキスト1冊を扱い(第16、18章はスキップする)、各自の問題意識を深めてもらう。政治学演習I(春学期)のあとの政治学演習II(夏合宿-秋学期)では、参加者が春学期の学習を踏まえてそれぞれ関心あるテーマを選択し、テーマ別に編成したグループ単位で研究報告を積み重ねる。ゼミの学習面でも運営面でも、参加者の自主性に大いに期待したい。ゼミもまた「自治」の実践の場だからである。ゼミに出席することは参加者の権利だが、そこには相応の責任がともなう。無断欠席は認められない。また、相当の理由なく学期回数の3分の1以上欠席した者は、ゼミに参加する権利を自動的に失う。春学期に失格した者は、秋学期に参加する権利を持たない。

授業の到達目標 Objectives

自治・分権をめぐる全体的な問題状況を把握する。そのうえで個別具体的な制度・政策・事例のレベルに落として課題を考察する方法態度を身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

参加者が自身の報告にあたって事前に十分準備をするのは当然だが、毎回事後に、すべての参加者がクラスで提起された論点等に関し、ムードル上に設置する意見・質問箱のスペース等を利用した議論に積極的に参加することが望まれる。

授業計画 Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回：小原(2012)を1回で輪読する。
第3回-第12回：磯崎・金井・伊藤(2020)を2章ずつ、10回で輪読する(第16、18章はスキップする)。
第13回-第14回：今後の打ち合わせ(グループ研究のテーマに関する討論、グループ編成、夏合宿の打ち合わせなど)

教科書 Textbooks

小原隆治(2012)「自治・分権とデモクラシー」齋藤純一・田村哲樹編『アクセス デモクラシー論』日本経済評論社
磯崎初仁・金井利之・伊藤正次(2020)『ホーンブック 地方自治(新版)』北樹出版
小原(2012)は、担当教員が受講者にPDFを用意する。

参考文献 Reference Books

開講時をはじめ随時紹介する。

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポ ² ート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	前述の出席要件を満たしていることを前提として、日頃のゼミへの貢献度を評価する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

開講中はアナウンスメント等の箇所を含め、ワセダムードルを丹念にチェックする。
関連URLは随時紹介する。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。
履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
110	政治学演習 I (シュラトフヤロスラブ)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	シュラトフ ヤロスラブ
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

ロシア近現代史

授業概要 Course Outline

*本演習では、ロシア近現代史を考察の対象とし、国際政治の文脈で分析する。ロシア帝国時代から現代にかけての政治や外交、民族問題などを多面的な角度から検証し、政治外交史の様々な側面の分析を試みる。場合により、日露・日ソ関係やロシア・ソ連の対外政策を中心とすることもありうるが、具体的な内容（実際に扱う時期や領域など）は演習参加者の関心次第で決定する。

*政治学演習Iは、テキスト（先行研究・史料など）の輪読が中心となる。政治学演習IIは輪読も行うが、参加者が演習Iの学習を踏まえて選択した研究テーマについてリサーチを行い、各自で報告することに重点を置く。

*本演習は学生によるプレゼンテーション・ディスカッションを重視し、各参加者が自主的に学習することが求められる。

*無断欠席は認められず、毎回積極的に参加することが求められる。

*合宿も行う予定であるが、具体的なスケジュールなどは演習参加者と相談の上で決定する。

授業の到達目標 Objectives

- 1) ロシア近現代政治・外交史（帝政期・ソ連期・ロシア連邦期）の様々な側面に対する知識を身につけ、北東ユーラシアの国際関係史について理解を深めること。
- 2) 各自の研究テーマに関する先行研究（日本語・英語、場合によってロシア語）を徹底的に調べ、批判的思考力を駆使し、口頭と文章で発表する能力を涵養すること。
- 3) 卒業論文を執筆するために必要なリサーチ方法や分析手法を習得すること。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

毎回のディスカッションに積極的に参加するために、必ず事前に学習する必要がある。

なお、プレゼミ期間中に下記の活動を実施する予定である。

*先行研究を熟読し、各自でプレゼンテーションをし、全員でディスカッションを行う（書籍は別途紹介する）

*1～2回数ほどフィールドワークに出かける予定である（詳細は別途紹介する）

授業計画 Course Schedule

主な活動は学生によるプレゼンテーションとディスカッションであるが、具体的な計画は、初回の授業でガイダンスを行い、参加者と相談の上で決定する。

教科書 Textbooks

適宜紹介する。

参考文献
Reference Books

適宜紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	授業への出席、ディスカッションへの取り組み、課題の達成度などに 基づいて総合的に評価する。

備考・関連URL
Note・URL

この授業は基本的に日本語で行われるが、ロシア語の学習歴を持つことが必須である。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
111	政治学演習 I (田中孝彦)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	田中 孝彦
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

冷戦期世界政治の歴史的変容 1917年-1991年

授業概要 Course Outline

* 田中孝彦ゼミの教員によるゼミオリエンテーションの動画を必ずご覧ください。

【問題意識】

1980年代末から90年代初頭にかけて終焉を迎えた冷戦の後、今日までの国際政治のあり方とその秩序は、依然として不透明な部分が多く、現代の世界秩序の姿は、まだ明確に見えてこない。この授業では、冷戦期の国際政治が、どのような変化を見せて、今日の国際政治の様々な条件を形成してきたのかについて、冷戦期国際政治の歴史的変化を大きく俯瞰することによって考察する。その際、冷戦期を国際政治の長期的な変動過程の中に据え、その変動の重要な過渡期として捉える視点から、議論を試みる。2023年度の政治学演習 I では、1917年から1968年までを扱い、冷戦の背景要因、冷戦の起源、そして、冷戦の変容について分析を試みる。

【授業の方式】

<討論中心の授業>

毎回の授業は、テキストの指定された章や指定された論文を各自が読んできて、討論を行う。その際、毎週2名の報告担当者(Commentators)が論点を提示し、それをたたき台として討論を行う。

報告担当者は、(1) 議論するべき論点 (2) テキストに対する批判、をあわせて3つ以上提示しなければならない。(1) については、なぜその論点(疑問点)が重要なのかについて説明が施されなければならない。(2) については、論理的および実証的に批判が展開されなければならない。報告担当者に加えて、討論者(Discussants)を2名置く。Discussantは、Commentatorの報告に対してその場で簡潔なレスポンスを行う。

<グループ討議>

特に重要な事件や問題については、学期中に2～3回、3つ程度のグループによる討議を行い、プレゼンテーションを行う形式を通じて、国際政治について考える訓練を行う。最優秀グループは表彰する。

<利用する文献>

授業で利用するテキストは、以下の著作である。

Fink, Carole (2018) Cold War: An International History, 2nd edition, Routledge.

また、その他の文献については、授業計画の各回を参照されたい。

【その他】

新型コロナの影響で、2021年度は実施できなかったが、例年夏合宿を行うことにしている。夏は軽井沢セミナーハウスで行い、学問のみならずスポーツなどのレクリエーションも行う。

授業の到達目標 Objectives

世界政治の状況を、歴史的に分析する力を身につけてもらう。具体的には以下を参照されたい。

- (1) 世界政治の歴史的文脈を、どのように見いだすか。何が終焉し、何が変化し、何が継続し、何が新たに生み出されたのかを見極める。
- (2) 歴史的現象の原因について、自分なりの仮説をたて、それを歴史的証拠に基づきどのように検証するのか。その手法を身につける。
- (3) 今日の世界政治における様々な問題の淵源を、冷戦期の現象の中に探る。
- (4) 歴史を学ぶことによって、現在の理解を深めるとともに、未来へのトレンドを把握する。

事前・事後学習の内容
Preparation and Review

【事前学習】

- (1) 授業計画に示されているテキストの該当箇所や論文は、必ず読んでくることが前提として求められます。
(2) 「国際関係史I」(旧「国際政治史」)を履修してあることが望まれますが、必修ではありません。

【事後学習】

- (1) 授業中に話せなかったことや、議論できなかった論点について、CourseN@viの機能を利用して自主的にディスカッションを行ってください。適宜、私もチェックしてコメントします。
(2) 学期中にショート・エッセイの提出を求めます。それを通じて、事後学習を行ってください。

授業計画
Course Schedule

第1回：冷戦史の視座

冷戦期世界政治の歴史的展開をみるために設定することが必要な視点について、講義を行います。

第2回：冷戦の序曲

第2次世界大戦において、終戦後にはじまる冷戦の条件が、どのように形成されたのかについて考察します。

第3回：ヨーロッパにおける冷戦の起源 1945年～1950年

米ソ対立およびそれによって形成された東西対立へのプロセスがどのように醸成されたのかについて、議論します。

第4回：史料読解 1

ヨーロッパでの冷戦の開始にかかわる重要史料を読み、それらの史料が意味するものについて、議論を行います。

第5回：冷戦初期のアジア 1945年～1950年

第2次世界大戦後から冷戦初期にかけてのアジアでの世界政治の変容について、考察します。特に、中華人民共和国の誕生、朝鮮戦争の勃発について学びます。

第6回：史料読解 2

朝鮮戦争にかかわるアメリカ政府の声明などの史料を読み解き、議論をこころみます。

<Midterm Report 1>

ここまでの授業に関連する自分なりに立てた論点について、ショートエッセイを提出してもらいます。

分量：2,000字程度(本文)

注釈：学術的エッセイとして、脚注をつけてもらいます。

文献リスト：参照した文献のリストを文末につけてもらいます。

ファイル形式：PDFをお願いします。

提出場所：Waseda Moodleにセットします。

提出締切：次回の授業の前日23時59分

※コメントをつけて返却します。

第7回：冷戦のグローバル化：「中心」の安定と「周辺」の紛争 1950年～1958年

1950年代における水爆の保有が、ヨーロッパでの東西緊張の緩和を導いた一方で、脱植民地化の進む第三世界が東西対立の重要な舞台となっていきます。そのプロセスと第三世界をめぐる東西対立の特質について学びます。

第8回：史料読解 3

冷戦のグローバル化にかかわる史料を読み解きます。

第9回：危機から緊張緩和へ 1958年～1968年

台湾海峡危機、ベルリン危機、ベトナム戦争、米ソ軍拡競争、そしてキューバ・ミサイル危機の展開が、東西間での危機を深めていきますが、それが逆に東西間の緊張緩和への転換をうみだしていくプロセスについて分析を試みます。

第10回：史料読解 4

上記のそれぞれの危機と、危機後に進展した部分的核実験禁止協定、核不拡散条約、さらにはこの時期に決定的となった中ソ対立にかかわる史料を読み解きます。

<Midterm Report 2>

第7回から第10回までの授業を通じて、自分で立てた論点についてショートエッセイを提出してもらいます。

要領は、<Midterm Report 1>と同様です。

第11回：冷戦と国内政治・第三世界

冷戦がそれぞれの諸国の国内政治や国内社会にどのような影響を与えたのか、そして内政が不安定であり続ける第三世界諸国にどのような影響をおよぼしたのか。これらの問題について考察します。

第12回：デタントの展開とその終焉 1968年～1979年

米ソ緊張緩和、米中和解といったデタントの生成発展のプロセスと、1970年代中葉から、再び東西間の緊張が深まっていくプロセスについて議論します。

第13回：史料読解 4

東西緊張緩和の展開とその終焉にかかわる史料を読み解きます。

第14回：冷戦の終焉 1980年～1990年

レーガン米政権の成立後に現れた「第二次冷戦」と呼ばれる米ソ緊張の深刻化から、1985年のゴルバチョフ・ソ連政権の成立を契機に急転直下、冷戦が終結していく過程について、分析を試みます。

教科書 Textbooks

【テキスト】

Robert McMahon (2022) *The Cold War. A Very Short Introduction*, Oxford University Press.

(邦訳、ロバート・マクマン著(2018)『冷戦史』青野利彦監訳、平井和也訳、勁草書房。)

※各自入手のこと。授業では英語版を使います。邦訳は自分の理解を確認するために使ってください。

青野利彦著 (2023)『冷戦史』上・下 中公新書

【史料集】

Edward H. Judge and John W. Langdon (1999) *The Cold War. A History Through Documents*.

※必要箇所についてコピーを配布します。

参考文献 Reference Books

適宜、授業で指定します。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験は行わない。
レポート Papers	20%	学期中に提出されるエッセイを評価する。
平常点評価 Class Participation	80%	報告担当時の報告内容について、その論理性、実証性、独自性を評価する。
その他 Others	0%	なし

備考・関連URL Note・URL

【授業形態についての重要事項】

基本的に対面で行う予定ですが、諸事情により一部Zoomによるオンライン実施になる場合もあります。その場合には適宜周知します。

【その他】

政治学演習I以降は英語文献をかなり大量に読んでもらいます。それゆえ、英文読解に自信の無い人には、ハードルが高いかも知れませんが、あきらめずに続ければ、かならず上達します。ガッツをもって果敢に挑戦する方に期待します。

史料などが掲載されているwebsiteのURLは、授業第1回目の授業時に、より詳しいシラバスを配りますので、それを参照してもらいます。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
112	政治学演習 I (都丸潤子)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	都丸 潤子
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

ヒトの国際移動の文化的・歴史的分析

授業概要 Course Outline

この演習では、多様な主体によって重層的に構成されている国際社会において、トランスナショナルな現象の代表例である人間およびその集団の移動が、どのような原因で生じ、いかなる過程を経て、どのような結果をもたらすかを社会科学的に分析し、理解を深めることを目的とする。分析にあたっては、理論にとどまることなく特に実証分析を重視し、政治的・経済的側面だけでなく、文化的・社会的・心理的な側面からの検討を行う。具体的には、移民・難民・ディアスポラ・出稼ぎ・派遣・留学・国際交流・兵士・人身取引などさまざまな形のヒトの国際移動に伴って生じる文化の接触と変容、移動者のアイデンティティの変容と権利・安全をめぐる問題、送出国・経由国・ホスト国や国際組織の関与、移動者と移動元・移動先の社会との関係や多文化共存のあり方などを研究対象とする。また、ヒトの国際移動の歴史は古く、特にナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーをつなぐ現象とされる植民地化と脱植民地化の過程で起こった社会・文化変容・外交政策の変化やヒトの移動の影響は、現在にも広くみられる。従って、このような事例に関する歴史的分析も重視したい。また、現在私たちが直面しているグローバル・イシューとしてのCOVID-19パンデミックや戦争と人の国際移動の関係の検討も試みる。これらの視点は、人間集団のなかでも、一般市民、マイノリティ、弱者の立場から国際社会の現象を捉えなおすことにもつながる。参加者と一緒に、より人の顔の見える国際関係像をさぐってゆきたい。

授業の到達目標 Objectives

国際関係においてヒトの移動が果たした役割を歴史的な文脈のなかで理解し、私たちが直面しているコロナ禍も含めて、現代国際社会のさまざまなイシューとのつながりを多角的に、人々の経験や感情を重視した(人の顔の見える)形で把握することをめざしたい。各参加者が現代の諸問題解決への具体的アプローチを、説得的に提示できるようになることが理想である。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示する

授業計画 Course Schedule

以下は主として初年次履修学生春学期 I の授業計画です。秋学期の演習IIにおいては、輪読も行いますが、ゼミ論のテーマについて、各自が報告、グループディスカッションを行う機会をふやします。1年でゼミ論を執筆する予定の学生、大学院進学・留学希望者には、早期執筆のための個別課題の設定や個人指導も行います。

輪読、報告と討論の回では、基本的に各回について報告者、コメンテーター(議論の口火を切る役目)を決めて、学生の主体的参加と討論を重視します。

3、4年生合同のゼミも有効かつ好評だったため、適宜合同開催も行う。

第1回: ガイダンス、導入的講義と問題提起: 国際関係論の研究・分析とは? なぜ国際移動が重要か?

第2回～第4回: 輪読とディスカッション: テキストを以下の教科書欄の導入的文献などから選び、履修者全員が事前に批判的・発展的に読んでくる。あらかじめ指定された報告者・コメンテーターが内容の紹介と批判的・発展的論点の提示を行い、全員で討論をする。

第5回～第9回: 輪読または3、4年生合同ゼミの形での4年生のゼミ論中間報告(各回2-3名ずつ)と質疑

応答。

第10回～第13回：ゼミ論テーマ・プロポーザル：各回につき、テーマの近い学生約3-4名ずつが各自のテーマ案を報告し、全体で質疑応答を行う。

第14回：まとめと夏休みの課題呈示（共通テーマによるグループ別共同研究、または共通テキストの批判的・発展的輪読）。

夏合宿はゼミ生諸氏の希望状況によって実施の有無を検討します。

実施する場合、内容は、夏休みの課題についてのグループ報告・討論、最終年次学生はゼミ論研究の中間報告となります。

教科書 Textbooks

<春学期 I：導入的文献>

ロビン・コーエン『移民の世界史』東京書籍、2020年。

S・カースルズ、M・J・ミラー著、関根政美、関根 薫訳『国際移民の時代 第4版』名古屋大学出版会、2011年。

ロビン・コーエン、ポール・ケネディ著、山之内靖監訳『グローバル・ソシオロジーI、II』平凡社、2003年。

トマス・ソーウェル著、内藤嘉昭訳『征服と文化の世界史』明石書店、2004年。

秋田茂『イギリス帝国の歴史-アジアから考える』中公新書、2012年。

塩川伸明『民族とネイション-ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。

滝澤三郎・山田満編著『難民を知るための基礎知識』明石書店、2017年。

（秋学期のIIではより発展的な文献、英文文献を輪読する予定）

参考文献 Reference Books

詳細は開講中に履修者の関心に合わせて示すので、ここでは主な参考文献をあげておきます。

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。

梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会、2005年。

日本比較政治学会編『年報2009：移民と国内政治の変容』ミネルヴァ書房、2009年。

平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』東京大学出版会、2013年。

山田美和編『「人身取引」問題の学際的研究』IDE-JETRO アジア経済研究所、2016年。

北川勝彦編『イギリス帝国と20世紀 第4巻 脱植民地化とイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2009年。

O・A・ウェスタッド著、佐々木雄太ほか訳『グローバル冷戦史』名古屋大学出版会、2010年。

ヴァミク・ヴォルカン著、水谷驍訳『誇りと憎悪：民族紛争の心理学』共同通信社、1999年。

梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化-日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、2005年。

ディヴィッド・バットストーン著、山岡万里子訳『告発・現代の人身売買：奴隷にされる女性と子ども』朝日新聞出版、2010年。

Walker Connor, *Ethnonationalism*, Princeton University Press, 1994.

John Darwin, *Unfinished Empire: The Global Expansion of Britain*, Penguin, 2012.

Philip D. Curtin, *The World and the West*, Cambridge University Press, 2002.

Marjorie Harper and Stephen Constantine, *Migration and Empire*, Oxford University Press, 2010.

Alexander Betts and Gil Loescher, eds., *Refugees in International Relations*, Oxford University Press, 2011.

David Kyle and Rey Koslowski, eds., *Global Human Smuggling*, 2nd edn., Johns Hopkins University Press, 2011.

評価方法 Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	20%	報告用レジュメの充実度などで評価する
平常点評価 Class Participation	80%	出席・報告内容・議論への貢献度を重視する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

本ゼミでは、積み上げ式の演習と論文指導を行い、上級生・下級生を含めたゼミメンバー同士の切磋琢磨を重視しますので、卒業まで必ず在籍して報告・議論に積極的に参加し、ゼミ論文を完成させる覚悟のある方を受け入れます。

留学計画がある場合には、各自の履修計画が履修／単位取得条件を満たすかどうかを事前に事務所で確認の上、応募時にわかる範囲で、あるいは留学決定後すみやかに、その旨教員まで申し出てください。

留学をまたいでの履修計画等については、履修・登録方法について事務所で手続きを確認のうえ、早めに教員に相談してください。

国際政治経済学科生、経済学科生も大いに歓迎します。

ゼミ初年次終了までにできるだけ国際社会関係論を履習してください。左の科目に加え、国際関係論入門もすでに履習していることが望まれます。

主体的に研究を進めてゼミ論を完成させる熱意を持ち、卒業後も含めて仲間を大切にし、建設的な議論のできる学生のみなさんを歓迎します。

学部で卒業し実務をとおした社会貢献を考える学生諸氏はもちろんのこと、国内外の大学院進学希望者も大いに歓迎し、その目標にあわせた指導を行います。

*政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
113	政治学演習 I (仲内英三)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	仲内 英三
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

近代西欧政治社会の歴史

授業概要 Course Outline

本年度は、19世紀後半から20世紀中葉にかけての英国とドイツの政治について、とくに政党の活動を中心に検討していきたい。同じくヨーロッパに属する英国とドイツではあるが、両地域における政党の発展は、歴史的・社会的・思想的なさまざまな要因から異なる発展を遂げてきた。それは当時の両地域の政治社会の違いを知るうえで重要であるばかりでなく、現在のヨーロッパの政治を考えるうえでも非常に示唆に富むものである。

なお「プレ演習」として、ヨーロッパ政治の歴史に関する基本的な文献をいくつか読んでいきたい。どのような文献を読んでいくかについては、春学期に行った講義「西洋政治史」で配った参考文献表のなかの、もっともやさしい基本文献のなかから、学生諸君の要望などを聴きながら選んでいきたいと考えている。

授業の到達目標 Objectives

近現代のヨーロッパの政治について理解できるようになる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示する

授業計画 Course Schedule

- 第1回：政党とその役割
(第2回－第16回：英国の政党の発展)
- 第2回：政党研究の歴史と政党の類型
- 第3回－第4回：1867年から1895年までの自由党優位の時代
- 第5回－第6回：1874年から1900年までの保守党の復活
- 第7回－第8回：19世紀後半（後期ヴィクトリア時代）の政治変革
- 第9回－第10回：19世紀末から第一次大戦までの政党の危機
- 第11回：世紀転換期の新自由主義の形成
- 第12回：世紀転換期の労働主義と労働党の誕生
- 第13回－第14回：1906年から1914年までの政党政治（選挙選を中心に）

教科書 Textbooks

なし。教師が授業内容に即したレジュメを配布する。

参考文献 Reference Books

授業のはじめに、参考文献の一覧表を配布する。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	演習の最後に少なくとも1回は小論文もしくはレポートを提出していただく。内容は授業の過程で扱った時代や地域に関して、各自が関心を持ったテーマについて、あまり長くない分量で書けるものを提出していただくことになる。
平常点評価 Class Participation	70%	演習は基本的に授業に出席することから始まるので、まず普段の授業への参加が出发点となる。授業では最低1回は発表の機会があるので、その出来具合も評価の対象となる。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
114	政治学演習 I (中村英俊)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	中村 英俊
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

国際政治の理論と現実－英国学派を中心に

授業概要 Course Outline

「グローバルなリベラル秩序」が流動化している。EU・ヨーロッパ統合（ブレグジットを含む）、アジア（インド太平洋）の地域統合、日米欧G7体制とG20サミット、国際連合（国連システム）、核拡散問題、気候変動問題、感染症拡大問題など国際関係・国際政治の事例について、その本質（「現実」）を研究（理解・説明・分析）する上で、私たちは一定の理論的枠組みを必要とする。

国際政治の理論研究は、第二次世界大戦後、アメリカの学界を舞台に発展してきたと言える。そこでは、リアリズムとリベラリズムの間のパラダイム論争が重要な位置を占めてきた。しかし、大西洋の反対側・英国（および他のヨーロッパ諸国）の国際政治学界では、アメリカの学問的流行とは一線を画した、独特な理論研究が積み重ねられてきた。「英国学派」（English School）と呼ばれる国際政治の見方（パラダイム）を学ぶことが、本演習の基本的目標である。

本演習は、プレ演習後にⅠからⅣまでを（2年余りにわたり）連続履修する典型例では、次のような段階で展開する。まず第1段階（プレ演習と演習Ⅰ）では、邦語・邦訳文献を中心にした輪読を通して、主にアメリカ国際政治学界で展開してきたリアリズムとリベラリズムの論争について概観したい。つぎの第2段階（演習Ⅰと演習Ⅱ）では、「英国学派」の国際政治理論についても基礎知識を身に付けた後、より専門的な英語文献に取り組みたい。具体的には、International Affairs、International Security、International Organization、International Studies Quarterly、European Journal of International Relations、Journal of Common Market Studies、Journal of European Public Policyなどの学術誌から各自が関心を寄せるテーマの論文を選び、報告・輪読の作業を重ねる。この段階で、各自が研究テーマを絞り込む作業を始めることになる。この段階で、各自の事例研究に必要な方法論（研究手法）の習得も始めることが求められる。最後に第3段階（演習ⅡからⅣ）では、それまでの理論研究の成果を踏まえて、（一次資料などのデータ収集を続けながら）各自が事例研究のテーマを決定する。そして最終的に、理論研究と事例研究が上手く融合する卒業論文（ゼミナール論文）を完成してもらおう。

授業の到達目標 Objectives

原則として2年間で、良い卒業論文を書き上げてもらう。そのために、順次、必要な知的訓練を重ねてもらう。

本演習Ⅰ（3年春学期）では教科書（Nye and Welch）および各章ごとに関連する文献を輪読してもらう。共通の知的基盤を構築した後、夏季休業中には各自の研究テーマを本格的に考え始め、演習Ⅱ（3年秋学期）では各自のテーマに即した先行研究（学術誌の英語論文）を輪読する。3年終了時点で、まずはタームペーパーを提出してもらう。4年への過渡期（2－3月）に、同タームペーパーに基づく報告会を開催し、卒業論文完成へ向けての課題（多くの場合は資料収集に関する課題）を自覚してもらうことになる。演習Ⅲ（4年春学期）では、卒業論文の中間報告を重ね、特に夏季休業中には（3年生も前に）報告会を開催する。演習Ⅳ（4年秋学期）で完成させる卒業論文については、1月末か2月初旬に最終報告会を開催することにする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

演習Ⅰに先立つ「プレ演習」では、演習Ⅰテキストの翻訳（『国際紛争』）を中心に日本語の基礎文献を読み込んでもらう。

演習Ⅰでは、英語テキスト（および関連文献）の輪読と同時に、各自の研究テーマを考えてもらう。（演習Ⅰでは毎週の事前学習として、レジュメ作成や輪読コメントの準備など多くの時間を割くだろう。事後学習としては、演習Ⅱ終了時点で完成するタームペーパーに関連する論点の考察を深める時間を確保する必要があるだろう。）

演習Ⅰの後は夏合宿などを挟んで、各自の研究テーマに関する日本語・英語などの文献（先行研究）調査を試みてもらう。演習Ⅱの輪読テキストは、各自の研究テーマを反映した、英文雑誌の論文（複数）である。

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：国際政治の研究テーマ
- 第3回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 1）
- 第4回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 2）
- 第5回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 3）
- 第6回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 4）
- 第7回：各自が関心を寄せるテーマに関する英語の先行研究の調査実習
- 第8回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 5）
- 第9回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 6）
- 第10回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 7）
- 第11回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 8）
- 第12回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 9）
- 第13回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 10）
- 第14回：各自の研究テーマの選定：先行研究の検討
（＊8月初旬予定の報告会：各自の暫定的研究テーマについて）

教科書 Textbooks

Joseph S. Nye and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History (10th Edition; Pearson 2017)

参考文献 Reference Books

適宜指定する

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	実施しない
レポート Papers	50%	報告用レジュメの作成などで評価する
平常点評価 Class Participation	50%	毎回のゼミへの積極的な参加姿勢など
その他 Others	0%	特になし

関連科目：国際関係領域の必修選択科目（「国際関係論入門」および「国際政治学」＊）に加えて、「国際機構論」および「地域統合論」は（必ず3年生までに）履修してください。（＊「国際政治学」は、奇数度の春学期に私が担当する予定です。）

学生に対する要望：切磋琢磨して学びあえる、厳しく楽しいゼミを創りたいと思います。様々なグループワークに積極的かつ主体的に参加してくれる人の応募を待っています。演習論文完成までゼミに関与し続ける意思および能力（実行力）の強さ・高さを選考基準として最優先します。

留意事項：毎週木曜5時限のゼミ（演習ⅠとⅡ）は時間を延長して（6時限も）ジックリと議論を深めます。2月初旬予定のゼミ合宿あるいは集中ゼミ、夏季休業中（8月初旬予定）のゼミ合宿あるいは集中ゼミへも参加してください。学期中の土曜日などに集中講義形式で「補講」を実施することもあります。

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
115	政治学演習 I (日野愛郎)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	日野 愛郎
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

現代政治の実証分析 (Empirical Analyses of Contemporary Politics)

授業概要 Course Outline

このゼミは政治を実証的に分析することに関心を持つ仲間とともに楽しく真剣に学問を追究するゼミです。ゼミのテーマは政治に関するデータを実証的に分析するものであればどのようなものでも構いません。データを分析するためには、その方法を学ぶ必要があります。たとえば、メディアと選挙に関する実証分析を行うとしましょう。そのためには「メディア」をはじめとする送り手の分析や「選挙」における有権者をはじめとする受け手の分析の方法を習得する必要があります。例えば、メディアや政党、政治家などの送り手のメッセージの分析や有権者や読者・視聴者・ユーザーなどの受け手の意識や行動の分析を行うことになります。このゼミでは、メディアや政党・政治家のメッセージを数量化する手法である内容分析 (content analysis) や統計モデルに基づく計量テキスト分析の手法を学ぶことができます。同様に、世論調査 (内容をランダムに変える調査実験を含む) やソーシャル・メディアへの投稿内容の分析方法を学び、有権者や一般の人々の態度や反応を明らかにします。また、複数の国や地域を統合的に分析する比較分析の手法 (マルチレベル分析) も、必要に応じて学んでいきます。テーマに応じて、適切な分析手法を学び、応用しています。現代政治の実証分析に関連する分野では、有権者の投票行動分析や政党の政策競争の分析をはじめとして多くの研究成果が蓄積されています。このゼミでは、これまでの豊かな研究の蓄積を踏まえて、ゼミ生同士でアイディアを出し合いながら、新しい知見を産み出すことを目指しています。この目標を達成するために、ゼミの1年目は実証分析をするために必要となる様々なデータ収集・作成の手続きや分析手法と一緒に学んでいきます。過去の研究を再現 (replicate) することから様々なデータ分析の手法を学び、共通のテーマについて話し合い、グループワークを通して実証分析の基礎を養います。2年目からは、自らの関心に沿って、先行研究を読みながらプロポーザル (研究計画書) を練り、卒業論文の作成を進めます。皆さんは卒業すると「学士」になります。多くの人にとって人生で最初の「士」になると思います。最終的に質の高い卒業論文を書き遂げて名実ともに「学士」になることが2年間のゼミの目標になります。

授業の到達目標 Objectives

疑問に思うことを学術的な問いの形で表現する力 (リサーチクエスションを立てる力)、「これは!」と思う答えを探し出す力 (仮説を立てる力)、立てた仮説が正しいかを確かめる力 (仮説を検証する力) を養います。これらの力は、学術の世界だけでなく、皆さんが社会人になる時に大きな武器となるだけでなく、日々の営みを豊かにしてくれます。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示します。

授業計画 Course Schedule

プレゼミ（2024年度冬クォータ）：R1グランプリ（統計ソフトRを用いて出版された論文のレプリケーションを行い発表するコンテスト）の実施
 第1回：イントロダクション、ゼミの運営について、合宿、OB/OGとの交流会に関する検討
 第2回：先行研究の先行研究を読む（先行研究のオリジナリティ分析）
 第3回～第5回：先行研究に関するグループワーク（関連文献を基にした発表・ディスカッション）
 第6回～第8回：先行研究のレプリケーション&最尤法に関するレクチャー
 第9回～第10回：グループワークに関する話し合い
 第11回～第12回：先行研究調べとオリジナリティの追究
 第13回：プロポーザル発表（プレゼミ）
 第14回：論文コンクールに向けた論文前段（イントロ、先行研究・オリジナリティの提示、仮説）の提出

教科書 Textbooks

特にありません。適宜文献を指定します。
 （プレゼミ）今井耕介『社会科学のためのデータ分析入門（上・下）』（粕谷祐子・原田勝孝・久保浩樹訳）岩波書店、2018年。（Kosuke Imai, Quantitative Social Science: An Introduction, Princeton University Press, 2017.）

参考文献 Reference Books

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	ゼミにおける学習状況、貢献度を総合的に評価します。他のゼミ生のプレゼンテーションへのフィードバックの量、質を考慮します。
その他 Others	%	

- プレゼミ（2024年度冬クォータ）は火曜日2限に予定しています。他の科目と履修が重ならないよう留意してください。詳細はプレゼミのシラバスをご覧ください。
- 本ゼミの1年目は火曜日2・4限、2年目は火曜日4・5限を予定しています。1年目は4限に開講されている4年生ゼミにも参加してもらい、2年目は5限に開講されている大学院ゼミにも出席してもらいます。先輩の研究が出来上がっていく過程をリアルタイムで見ることは生きた教材になるはずです。
- 3年次終了までに、「計量分析（政治）」と「政治テキスト分析」を履修することを、ゼミに参加する条件としています。
- 通常のゼミや合宿への参加は必須です。欠席が多くなる方はご遠慮いただいています。
- 入ゼミ後に課題があります。過去のゼミ生（1期～10期）の卒業論文の中から1つを選び、その論文を2000字前後で論評してもらいます。論文集は下記URLから入手できます (<https://goo.gl/xm88Mj>)。ゼミの面接時に感想を尋ねる可能性があります。同じURLにゼミ生が作成したオリエンテーション資料も格納されています。
- 普段のゼミの様子はゼミ公式のX(@airohinoseminar)やInstagram(airohinoseminar)をご覧ください。
- 留学を予定している学生や留学から帰国した学生にも学びの機会を作っていきたいと考えています。個別にご相談ください。定期的に外国からゲストを招聘し、最新の研究成果や手法について学ぶ機会を用意する予定です。This seminar is open to EDP students. The working language of the seminar will be mainly Japanese but the instructor is prepared to accommodate students who are interested in learning empirical and comparative analyses of media and elections in general.

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。

履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。

The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.

Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.

<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>

政治学演習 I

2025

整理番号 No.	科目名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
116	政治学演習 I (谷澤正嗣)	春学期	JDP 3 年以上・2 単位 EDP 2 年以上・2 単位	谷澤 正嗣
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014～2018年度入学者		所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副題 Subtitle

現代リベラリズムとその批判

授業概要 Course Outline

政治を語る際に用いられる重要な概念について分析しつつ、「権力とはどんな力か」「自由と平等を両立させる政治体制は可能か」「正義と不正義を判別する原理は何か」といった問題を扱うのが政治理論である。政治理論の研究は古典古代にさかのぼる歴史的次元と、きわめて抽象的な哲学的次元を有するが、本演習では現代の哲学的研究に焦点を合わせる。こうした研究の多くが議論の枠組としているのが、「リベラル・デモクラシー」と称される現代の政治体制である。自由、平等、寛容、複数性、正義といった重要な価値や規範についての、特定のリベラルな構想を肯定し、リベラル・デモクラシーの制度と実践を正当化する志向を強くもつ政治理論を「現代リベラリズム」と呼ぼう。他方、それらの価値や規範に対する批判に重きをおく政治理論を「現代リベラリズム批判」と呼ぼう。現代リベラリズム批判の例として、功利主義、アナーキズム、リベタリアニズム、フェミニズム、批判的人種理論、ポストモダニズム、ポストコロニアリズム、そしてポピュリズムといった観点からの批判が挙げられる。本演習では、現代リベラリズムとそれを批判するさまざまな潮流のあいだの対話を追いながら、現代リベラリズムがどのように洗練されてきたか、それにもかかわらずどのような問題に直面しているかを明らかにする。

授業の到達目標 Objectives

- (1) 現代政治理論の主要な論点、とくに現代リベラリズムとその批判について理解する。
- (2) 哲学的な読解、思考、表現、討論の技法を学ぶ。
- (3) 政治学演習II、IIIおよびIVを受講し、演習論文を執筆するための能力を涵養する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

ゼミでの討論に先立ってテキストを読んでおくこと、討論の後にあらためて自分のテキスト解釈を考え直すことを求める。とくに、事前のテキスト精読は必須である。

授業計画 Course Schedule

第1回：イントロダクション 政治理論とは何か
第2回－第13回：文献講読と討論
第14回：まとめと討論

教科書 Textbooks

開講時に受講生と相談の上で指定する。いくつか候補となる著作を挙げておく。
 フランシス・フクヤマ（会田訳）『リベラリズムへの不満』（新潮社、2023年）。
 チャールズ・W・ミルズ（杉村／松田訳）『人種契約』（法政大学出版局、2022年）。
 ポール・ケリー（佐藤ほか訳）『リベラリズム』（新評論、2023年）。
 ジョン・ロールズ（川本ほか訳）『正義論 改訂版』（紀伊國屋書店、2010年）。
 ジョン・ロールズ（田中ほか訳）『公正としての正義』（岩波書店、2020年）。
 ジョン・ロールズ（神島・福岡訳）『政治的リベラリズム 増補版』（筑摩書房、2022年）。
 アイリス・マリオン・ヤング（飯田ほか訳）『正義と差異の政治』（法政大学出版局、2020年）。

参考文献 Reference Books

川崎修／杉田敦編『新版 現代政治理論 [新版補訂版]』（有斐閣、2023年）。
 齋藤純一『不平等を考える』（ちくま新書、2017年）。
 齋藤純一／田中将人『ジョン・ロールズ 社会正義の探求者』（中公新書、2021年）。
 戸田山和久『最新版 論文の教室』（NHK出版、2022年）。
 ウィル・キムリッカ（千葉／岡崎ほか訳）『新版 現代政治理論』（日本経済評論社、2005年）。
 デイヴィッド・ミラー（山岡／森訳）『はじめての政治哲学』（岩波書店、2019年）。

評価方法 Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	100%	レジュメによる報告、討論への積極的で協力的な参加、討論から明らかになる文献の理解度などを総合的に評価する。
その他 Others	%	

備考・関連URL Note・URL

政治経済学部では以下リンクの通り、学修成果を定めています。
 履修登録やご自身の成果確認の際、ご参考ください。
 The School of Political Science and Economics defines the learning outcomes in the link below.
 Please refer to this when registering for courses and checking your achievements.
<https://waseda.box.com/v/SPSE-Learning-outcomes>